松屋外集 二編

巻十六

101

15
398
10

三編松屋外集

巻十六

百八十二番

1398
10

二百二十八
高田早苗

二編杉屋外集巻之十六

目録

虚無偏考

二編杉屋外集卷之十六

平與清稿

盧無僧考

目錄

晉露盧無僧普化宗考

古書引證

本則

捉書類

列祖心傳

凡八開櫝之例
宝暦五年三月修行心なる
宗門心なる方学ぶる
土法宗罰
普化宗興起並諸派
虚無僧等数

虚無僧考
○暮露虚無僧普化宗考
興清曰虚無僧は古く暮露とも
暮露とも馬聖ともいえ頭
髪を半より切て今の散切の貌に
し抹額をゆい帷紙衣などに黒心
袴を着打刀をさし足袋をはき
棒を突ばして勧進しんぐり

馬などは騎りんゆえ馬取ともよぐ
るるや形なり津国宿河原の
さまは道場を撫て念仏をすり
し仏をして勤行し名をば虚空
坊いろおし坊梵字某漢字
などやうはきこり暮露とは好
ばらくと乱れるさまよりしなれ
の説 大全 後花草 あれどうけがし その
青物の紙衣ハ ぼろくと破もやはく

て発心集 七巻廿三丁左 ぼろくとある布小
袖とも見え今世も古衣のいやしくや
さるをぼろといへり 今物語 十七段 に
法師のまことにあやしげなるが かしら
はあづ髪に まて紙衣のぼろくと
あるこしち青こるとも色をおりつに紙
衣にかさる名なるゆうつなし古紙
糸女づ有にかけし比礼とふ物もひに
ひらとしらぬよりいひ奥の鰭をる

おなじさて戒衣して矢を振ぐらあに
用る母衣し比礼と通音にて
とひしめくいふ名なるをおもふに紙衣
の白を戒衣の母衣にとへてしらんに
急ぐてゝ其出立の姿は高雄の
文学坊の勸進姿の黒衣の裳
短きに黒袴脛ゑに著同色の
袈裟かけて太刀を腰に横くる縄緒の
弁足太はきしる 源平盛衰記 十六巻十四丁左に似

かなひてゝこゆそせより軽りて紙衣
を肩にかけ面桶を腰にかけ尺八吹
るりをもはらとし又変りて編笠を
著袈裟をかけ尺八を吹免ぐる躰
はなまぶなり虚無僧といふ虚
無寂滅の意にて禅宗の心僧を
承継ふるゆえの名なるべし虚無は
司馬光が通鑑の論に花泉虚無の
学を指て虚無之道といひ朱熹が大

学の序にも老佛の道を異端之
虚無寂滅之教といへり司馬相
如が上林賦に乗虚無與神俱河
上公が老子章句に天地之始者道
吐氣布化出於虚無為天地之本
始也などの字面を虚也とし虚無とも
通用し又薦僧とさつかるゝ其
訓を僧ゝる如きなれば意義
あるにあらず慶長の比より普化

[illegible]老説叢篇[illegible]無者得以[illegible]應變而合[illegible]解也

大光明蔵智威禪師の[illegible]本性虚無縁[illegible]我一[illegible]

宗と称は京都明暗寺の創庵が
一休和尚にはのり自好る人八を普化
振鈴の三丈に傳會せし說を襲ゝる
ありしかゝ風穴の延沼禪師の法は
嗣ゝりとはいへ[illegible]虚無
僧尺八を吹ありくれは廿二番職
人歌合にもよみて[illegible]以前より[illegible]
しすとゝ今熟拔に南宋鄭州
普照寺の道怡禪師の衣を着

黄犢を跨り短笛を吹ひ道我
凡耶嘗向聖位中来道我聖耶
又向凡位中去道我非凡非聖
耶却向毘盧頂上別有行衆
といひあるまゝ明高僧傳巻ハ
ゑえてわゞ古きゝよりて工夫し白
衣を紙衣にうへ短笛を尺ハにうへ
或時は駒ありきゝんより馬
聖といふあるは黄犢に乗きるまゝねぶ

しめべし又南宋晋晋亭の妙音
禅師ゞ鉄笛を吹ひけんも似
こゝのかゝ有道情の流なるべきを
あるゝ僧の尺ハを吹ひ佛祖通
載法秀傳に唐の玄宗の前身終
南山回向寺の吹尺ハ僧なりし
影聲響を好に因て降て唐の天
子と為せし記せ給ひしなきまゝ
あれば我て其名称始は暑[illegible]とも

暮露（ボロ）

カミイは考證の條下を閲れ知べし

○砂石集ハ下巻（治字本九丁左）貧窮追出事条ニ所領得衛ノ後ハヒタスラ暮露ニ〻ノ如ク三天帷ニ紙衣キテ寝ルニ足モ身モ冷ズ云々

【注】暮露ニ〻ガ帷紙衣者イ知べし

○續教訓抄ハ廿二下巻（十三丁左）ニボロ〻ト云モノイサカヒラシイデ〻アラのリノ人マデ

ワヅラハシカリケレバ云々

【注】從死草ニ飛執深く鬪諍ナミタトヒ放逸を慙のあるよ

ヒあるよ等合せり

○從死草（上巻百十五段）ニ宿河原といふ所を。ぼろ〻おほくあはまりて。九界の念佛をやはるに。我より入るぼろ〻の。若此ノ世ニ。いろおし始とやほうあお

字。などいひける者。其始なりけるとかや。
世を捨てるに似て。我執深く。佛道を
ねがふに似て。問諍をもとれ。放逸
無慙の是さまなれども。死を輕くして。
かしなづまざるかの潔くかぼえて。
人のかたりしかたに結びなりけり。
壽命院抄 上巻ハ十ハ丁右 よボロぐ上ハ関
東辺ニハコモ僧ト云モノヲ云トナリボロ

ボロ草子ト云物アリ其心ニ通タル
事多シ云々野槌 丑の巻六ナニ丁右 よぼろぐ
暑露とおとしいへども梵論とおぼしき
梵字漢字などいふ名にあはぐしぼ
ろぼろの草紙一巻あり虚空房
といふものの物の七尺ハ十力強し
ゑちきかくぼぬ一尺ハ十の太刀を
はきひるまきの八角棒をよこくし

一尺ゐすの分段をはき、蓑もく多
黒くして、ぢろといふものなり一人
の男女を妻とし同行三十人諸国を
ありくといへり其ゝ場を薦僧といふ
僧とも云へば俗とも云へば山伏
とも云へば刀をさし尺八をかき背
中にむしろをおひ陸路をあるき
人のつゞみに立てものを乞ひしふ

是ぼろぐの流れと云へり此ぼ
ろぐの世を捨て佛道をねがふやう
なれども我執深く闘諍をこのむ
事をいへり鍼に其ゝ事を餬ひありき
て朝に一鉢をえて暮に一澄を
むる弓人も一旦溢死するを何
とおもはぬ事を闘諍をこのみて飛
蛾の火に入がごとし佛道を修ると

いふ名にあひぞ其弊如此に至ること
も世教のうえを思はざるひがことす
おこ初りさればぼうぐが其師のこ
先に仇をむくいて死を快にする事の
潔を兼好がともなる此派の如意也
世の人の君父の仇を忘れ武夫のひく
ればきかを逃れるはぼうぐの死
損におとりこし大全七の巻二十左に盤

齋云暑露とかくとはども枕論とかく
づきなりだんじうんじなどしかるもあさぐ
ぼうぐの草子一巻あり中暑 私云ほうぐ
の草子と云ふ語なる引ふしにお
違欲け草子の大暑に一人の女性池を
賣て業とし みたあしくして暮がとば
このりにゑえ此さば世に暑とぞいそける
け女ある時蓮花を懐中にも愛えて

一子をうめり又ある時虚空をのもと
にて次男をはらり此母死れば妻彼
兄弟七歳にして兄を蓮花坊弟を虚
空坊とぞいふ蓮花坊に念佛修行を
話因をたゞる虚空坊陪僧の風を学
びて頭髪をすりて僧にもたる
紙衣着て八尺の檜木樽をつき笑を
負其中に一人の美女をいきしめ話

因を行ぬべる其宗とはる所に本方の
意を示し答るにいひ得ぬものを樽に
てたゞき殺して通りしとし後京に陽り
来て蓮花坊にぬづりあひぬ空坊云
蓮花坊ならば念佛愚行に虚空にして
至尊の旨をねざるやと云蓮花坊も答など
して五六間答あり いひ終て二人共に
消失せらるゆしし女性も蓮花坊も佛

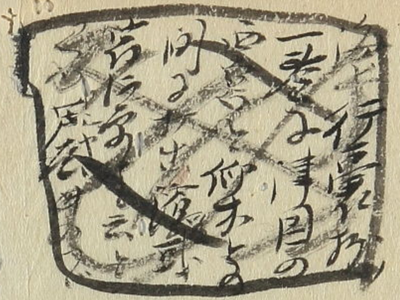
の化身也双紙の結語に虚空論の頭髪
を中半にきりて ぼろぐまして と草子
の文にあれば ぼろぐの草紙も油賣の
草子も云し 明恵上人の内にも彼
蓮花虚空の問答を演んとあの故に
設て言ふなる此りものがたりに 此を兼
好時代に此草子流布して異形の
僧あれば ぼろぐとしてなるべし又此

ぼろぐのぼろぐに例せじを比寛永年
中に鉄心空道と云二人の悪僧衣の
たちに大脇指を帯し諸国の人民を
なやましなるにありけれどいなるべし
云し 諸物大成 十の巻十七丁左 に 暮露ト云
ハ彼女クレブトニノミ出ケレバ暮ニ露ルヽト云
コヽロニテ暮露ト云ゾ 其暮露が子
ドモタルニヨリテ カク名付シゾ サレドコヽニ又ルハ

其流ニテハ大ク今云虚無僧ノコトリ越
後駿河摂津回ニ鳶僧多シ其流ノ
戦ニ始ミヅ一ノ違アリ一夏九旬ノ中ハ

大勢アツマリテ禅
都大仲ノ前ニテル
又配アスルナリ
祖師

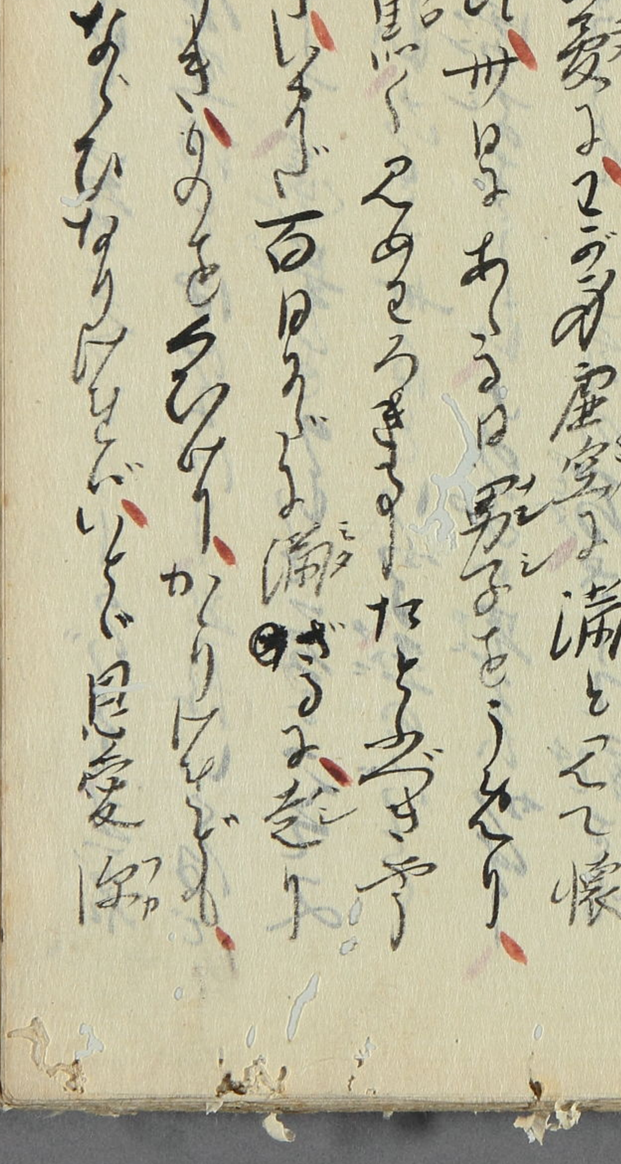
○空花論 一丁にさる比都にくせとて油
うる女あり暮すり和に人に見えざり
はさば其名をくせとぞ申ける彼女ある
事の愛にてこの事 虚空に満と見て懐
妊し卅日にあたる日男子をうみたり
色黒く見めるろきまるしたとぶきやう
なしいまだ百日にだに満ざるに起り
ありきものをうひけりかくりけれども
母のなくひなりけれども恩愛深



其流ニテハナク今云虚無僧ノコトリ越
後駿河摂津国ニ蔦僧多シ其流ヲ
戦ニ始シヅヽノ違アリ一夏九旬ノ中ハ
大勢アツマリテ禅話ヲスケルコトアリ京
都大佛ノ南ニアル妙安寺ハ虚無僧ノ
支配ヲスルナリ達磨ト普化和尚トヲ
祖師トシテコレヲウヤマフ云々

按海上行囊抄一巻ニ津国の西
宮と仰木との間ニ出濱ヲ
或宿河原ともいふ云々芦屋
のはぶきなり

本の夏ニ至ゴ者ハ虚空ニ満とて懐
妊ハ卅日ニ あるハ男子をうまり
色黒く見めるさまなりたとゑばきや
なしいまだ百日ならざる満ざるニ起り
ありきものをうひけり かくりけれども
母のならひなりけれども恩愛深



~~[illegible]~~

其流ニテハナク今云フ虚無僧ノコトナリ越
後駿河摂津ノ国ニ薦僧多シ其流ナリ
我ニ於テ一ノ邂逅アリ一夏九旬ノ中ハ
大勢アツマリテ禅経行シスルコトアリ京
都大佛ノ南ニアル妙安寺ハ虚無僧ノ
支配シスルナリ達磨ト普化和尚トヲ
祖師トシテコレヲタフトフヘシ

圏海上行嚢は一巻子津国の西
宮と御木との間よお出濱る
或宮河原よりふミて芦屋
のほずきなり

其流ニテハナク今云虚無僧ノコトリ越
後駿河摂津国ニ薦僧多シ其流ノ
戦ニ始シマヽノ違アリ一夏九旬ノ中ハ

○空花論 右一丁にさる比都にくせとて油
うる女あり暮すり和に人に見えざり
はさべ其名をくせとぞ申ける彼女ある
事の愛にてこの事の虚空に満と見て懐
妊し卅日にあたる日男子をうみたり
色黒く見めるろきまるしたとぶきやう
なしいまだ百日にだに満ざるに走り
ありきものをうひけりかくりけれども
母のなくひなりけれども恩愛深

かりけり家にえらりしのびとて其名
を虚空坊とぼけにけり其後いくほど
なくして蓮華をのむと家にえて又
はじむ其をも世はといふ玉のごとく
なる男子をうしむ其子い兄にかすり
生きしより三年の月やして乳をも
呑ばぬをも喰ばぬ即もせん泣もせば
目うちあはしかるえ出して默然くり

三年にある日はじめて立て西に向ひ
合掌して南無阿弥だふとなんけり
その比人かしぎの思ひをなやり是も
家にあるをて蓮華坊と付けり母
に孝行なるゆ昔の佛菩薩の如
し兄の虚空坊い母のいふ事なきバとも
さしてそむのびに母をとてなつてしむ
事もなし けつくゆけやうい三れ人に

父あはれにこそ母あはれときいとも住けるの
ものとて蓮花坊とよばれあはれとみ虚
空坊とよばれけり蓮花坊は
さて母の仰せにたがはずなりけるまで
てかを堪しく念仏し虚空坊は大行
飯して食ひ揃ひ所隠に向ひて居眠
しあるいは切刃ふがけてえさきけるさる
ほどに仇等十さいになりし年の

ころよそにて見ける手をしたて母空く
なりまたしこと其後家をうり二がん
まうけ一合に米あくいま一がんの
ころにて一尺八寸ありける刃脇差
たる鉄衣と衣と黒き袴とをきて
暮露といふものになりてもつれ
てまをとりてあれあきやくやなうて
いそくこと又古さて虚空坊があり

さまをたよふづきすもなし。賀に空
方に生上り。笑思くこけるく。寅
に夜叉鬼王の如く。惡人を殺れる
その数をさてげかりけるとしてゐる
えんやらん。容顔美麗なる女を一人
かゝらひ。簾中とんづけて壹しけり
この虚空坊の。おい七尺ハす。力ハ六十
五人ぶ力。繪ゑ紙衣に。宣袴きて

一尺ハすのお刀をさし。蛭巻の八角
棒を横ふ人。一尺五すの高足太をは
きけり。おれじやうなるぼろぐ
世人引具して。諸国を行脚にるに
えきく人かそれてかりそめて。非遇
んといふ者なし。たゞれどもたゞるを
ばせざりけり。よるい袈を引うづき
座禅にるし。東西南北国を称さば

一見しと云文字　或人虚空坊に問て
いはく御辺ハ何宗の人ぞ答ていはく
我ハ大日覚宗の者なり　云文十一丁右
又問て云ことぞうしやしながらも仏館
をかくの如くぎやうじ伽坊をこくる
さうは世にたぐひなしみつよくいけ
るくみかんあしきいせんつきなきい
しのてやん壁の空さうまみせしあがり

紙衣に名のつけい黒衣にあかきあをくて
檜笠の様さきにながてんのでの
形ぞやいさもて女まはさて肇帯
と名づくがしつきやうさうまんなりで
ちしばろくこつじきの身にて我書を
肇けとハ何事ぞや　云文十五丁右　なん
ぞぼろぐ乞食の身にて我書をきかん
中とハ何事ぞや　云文十八丁右　虚空坊

いよ〳〵はやくてろくきし在郷に蹴すし
ざましき異体なりし紙衣は古き褊衫
袴は古びし裳に心ばかりいさゝくそくの
僧は道具坊とていそくさこそ打刀と
揚をも古びたる鍔や菖ていそくちかう
名のさしくみんたかいきとも利剣椿
こゝろも被こたぶりし悪魔を降伏
ほうく

按 源平盛衰記ノ十八ノ巻 十四 文覚
覚ハ高雄勧進の事より黒衣
ノ袈裟衣キテ黒袴脛高ニ
着同色ノ袈裟懸テ太刀ヲ
腰ニ横タヘ縄諸ノ平ニアシダ
ハキテ勧進帳ヲ手ニ握りと
あるい庵室坊の出立の姿よ都
し空花論一巻刊本あり
一名ばちくの草紙上より奥

書は明恵上人の遺物の上
し記しこれどいのがあらん中
に石田二十年が間ど浄
土宗といふ人あれはもどいと
いふ諸ゝ弟は浄土宗の
念佛者兄は暑露といふ
ものゝ間答にて遂に念佛
者雌伏する趣の物語なり
後世草大全の説に虚空坊

が頭髪を中半にきりて
ぼうぐにして草子の文
あれば ぼうぐの草子とも油
賣の草子ともいふなりとあれ
ど頭髪をぼうぐにしてと云
諸今の空花論にはこれば
数聚名物考ノ称号ノ部十第
に異本あるよしいはれば大
全はさる本に搭ゆるにやいはれ

おぼつの所し 死て空花論
とりふ所号い 虚空坊と 違
花房ごの名をよせりとてゐ
○七十二番職人歌 [illegible] 暮露
合 四十六番 右
法の月ゐれ 見えて 見えぬ
ゐるぼつの草の 斧 判詞 暮露
の心目いいうば 切りの法の光をうひ
こまふべき 信仰 なくおぼゆ

いとふなよ かばふんの馬 ひじ見へ
のきくべき あのあとなし 判詞 左の馬
ひじ見へ 足の 言せば 切ん駒とびといふる
万葉の古風 もよりきたりて 神ぬる
侍りこそ
囲 暮露を 馬聖とよみてり 囲
ゐ 蜀を 中半に 切て 鉾 巻し
黒 袴 着て 打刀さしたるさま
そもお刀の鞘 尾に 大 招 着たり

虚空房の出立のさまのよ雨る
がふるなり

○桂川地蔵記上巻左丁に或有学發
露之者云々

按桂川地蔵記上下二巻[illegible]
弘治二年二月六日記之[illegible]
[illegible]桂男廿三所順礼行者の
簡抄六十六部回国の経聖
下大原女小野の賣炭翁自然

居士の編木摺などのまゝ並載
さばいづまゝ[illegible]
[illegible]

○大内家壁書文明十八年四月廿九日禁制
辟書類従四百二巻卅七丁右に蓍僧放下猿引支
可拂ニ当下并近里事云々

○卅二番職人歌合六番右に虚妄僧
花ざかり吹ともこのしよふづき風まい
おもの六もの八判詞に蓍僧の三昧

紙衣(カミギヌ)縮(カタ)まのけ面桶(ノウ)腰(コシ)につけ其鍋の
門戸によりて尺八(シヤクハチ)かくかれ別の業なきい
者まや さまざまとも誰のいとふべきと
いひて風ないあゝぬ其もが尺八とあるに
花盛とおけるに其の風なき花の時節
さて尺八の響(チヨウ)ハ一しほなるべくいひしやう
たよりし箕冒(サンカキ)の土形(ゴギヤウ)なりしに古も僧
の一曲やさしくまこゝまるまや云し

○又 廿二番右 虚妄僧(コモソウ)

さしのも味噌屋(ミソヤ)酒屋(サカヤ)の糟法師(カスガウ)
声(コエ)をかへてもはふい茶(チヤ)がたるも判詞にも
も僧のうたかんぼうしに気食(コツジキ)の愁吟
をあげりて ひばかなる所の節に世を
ひぶる出家体きこまいふしいひしもうなき
方便(ハウベン)とこそおぼえ侍也味噌(ミソ)も酒(サケ)
ちれしぬ詞(コトバ)にて糟法師(カスガウシ)いひしりて
きこゆ云し

問 虚妄僧(コモソウ)とあらさい虚気(キヨブ)虚(キヨ)

亡などの字面に通用にはなし
無をモと訓にいへるにつけ南
無阿弥陀仏をナモアミダブツ
といひそれは南無を南謨とも
書き無ハ旦の假名に用ひしにこ
薦僧と書しは訓をかりて
こもそうを虚無僧に同じ薦
僧が三昧紙衣を肩にかけ
面桶腰にさげ黄鐘の門

え乞人ハ吹尺八さまよひけり歌合の
歌及判詞など見て想像し

三
〇太閤記十五巻秀吉公異形の序に
え房遊興の事の条の白洲にて右に示す
旦普化僧たち事さい猿使の類
さまよひのものどもあそびしこと
圃 普化僧にコモソウと旁訓
せるは寛永以後の書なるにや

四
〇常山紀談ノ二巻に水野忠重の嫡子勝

成云々荒者まで人をあとしたび忠重の
心に忤ひ虚無僧となりて国々を廻り
武者修行に云々勝成は若き時ハ
過ちて武州の金川振無流の弟子
なり人八一本携て虚無僧となり
本国を廻り或時は堂塔に来を吹し
或時は坐れも山にも日をくらし さまざの
艱難にあひ人にも誹らはしが一
虚無をいふなし不仁の振舞せざりし

ゆゑにや今福山十万石賜りぬ此
ごとく下の情を知るゆゑ虚無僧にし
なし云々

一〇運歩色葉集古部に薦僧 コモソウ
云々

二〇下学集増補上一巻 卅四丁右 人倫門
に薦僧コモソウ云々

○節用集大全 一巻保集ノ上 暮露々々 薦僧之数也中古結徒堂迴天下見行徒死草云々中ニ 土の巻古集人倫門 薦僧普化居士云々

○雍州府志四の巻寺院門上ノ妙安寺 愛宕郡部 在遵華三院南而為祥利近世有異僧號朗菴不知為何處也嘗与龍宝山大徳寺一休和尚相親常宴風穴演弊之作略自好吹尺八或自

称風穴通者元住宇治郡吸江菴又暫住斯寺世所謂薦僧之本寺也斯徒露宿風浪不厭險難經歴諸方到處坐擧薦而為足故称薦僧或謂虚無僧也乞命者或逃世隠斯宗門者間有之中世有暮露者是亦薦僧之数也凡東関[illegible]也西州風穴道者門派之

本ハ[illegible]ハは飼菴の[illegible]

[illegible]

[illegible]

之ヲ吹ヲ

下学増補 上之一巻 人倫門 ニ薦僧 つモソ中ニ

なお下学集増補は寛文己酉年の

山脇道円が序ありしその此の書生の

撰し

寺院在リ凡ソ一説ニ前蕃墓普化
振鈴ノ作ル墓ニ
唄尺八ヲ見ル則風穴
之有ヲ

風穴延沼禅師ノ嗣臨済
三ノ巻、十丁ヨリ
迫ル者之ヲ取ル者ヲ手ト云ヒ
迫者之ヲ取ル者ヲ手ト云ヒ以テ吹尺八ヲ見ル則風穴
尺八ハ普化
振鈴
夫ヨリ吹ヒ
禅席ノ
ナシ

下学増補 上之一巻 人倫門 ニ 薦僧 つモソ中云

なお下学集増補は寛文己酉年の

山脇道円が序ありて其の此の書生の

撰し

摂陽群談 三の巻 川部 ニ宿川原嶋下郡
宿久左村ニアリ此所ハ昔暮露眞リテ
九品念佛ヲ修スルノ地ト云ヘリ川辺武庫
矢田部等ノ郡中ニ所論之アリ其ニ
證不詳ラ和名類聚ニ延喜式ニ嶋下郡
宿久ノ名アリ云ヘ一説ニ郡内ノ郡山邑ノ
駅ヲ指テ宿河原トス云ヘ
類聚名物考 秋号 部十 ニ ほろし 虚無

僧の事ニ髪を童子の如く切てばらく
とおちたし たまだやぶてほろじといふ
物の散ニなるをほろじと思ふ事
ニ又梵論師の轉語ニ云ヘし 法
論ハ非ニ云ヘ
有識備考 大五の巻 ニ 濫觴集ニ曰暮露
ニ之事信實子息土佐守信兼トテ
和歌似セ繪書ノ家ニテ後堀川院ニ

奉仕薄ト云ヲ端者ヲ思ハレケルヲ父母
不受事ニ思ヒ菓中納言ノ婿ニ成シ
ケレ共最志モ無ク見エケレバ薄ヲ丹波
ノ所領ヘ流遣シケリ懷妊シケルガ思死ニ
死ケリ土佐守此事ヲ聞テ彼ガ具足ヲ
見ルニ手筥ノ中ニ捻リ名文アリ見レバ
暮ヲ行ツホドヲダニ尚ナデキシニ烟ト
ナラニ果イカニセシ是ヲ見テ悲ノ餘リ

ヲ切經北陸道奥州ノ方ヘ修行シケリ
衣裳モ破レテ袴計着ケレバ人袴殿ト
名付ケリ是暑露ヽヽ始名尊阿弥陀
仏ト云ヘ

山城名勝志ノ十五の巻 丁左 愛宕郡ノ附
録ニ妙安寺ハ在リ蓮華王院ノ南ニ虚
無僧本寺也 西国三十三州属之遠
磨普化共ニ為祖師ト云ヘ

和尓雅三の巻ナ一人倫門ニ薦僧又
称ス虚立僧ト或称ス暑露ト云
書言字考 大倫門 四の巻 人倫門保部ニ
梵論又作ル暑露ト今世普化僧之属ト云
ナリ武部ニ普化僧ニヒシリ云ヘ
不部ニ普化僧文明年中異僧朗菴
慕ヒ普化振鈴作略自称ス普化道者ト
又常ニ唱ヒ人ノ位宇縣吸江菴及京師ト

妙安寺ニ後不知其終處ヲ云ヘ
ニ普化僧コモソウ盤山宝積弟子普化禅
師遺流見丑燈會元但今世所ノ称ス
者以朗菴為始祖ト云
忍辱隨筆 下巻廿七丁右 普化和尚字ニ仙跡
奇跡三 消桂堀 云師

更詳之ヲ

右本朝保護一巻 四右保部佐語ハ暑寄ニ今の
屠僧し虚無僧とよむ也 推ニ梵論と云ヘ上をあり
ばちくの事なとしあり 是世間ニ多き路を以 其上人は袋とりよ 人ハ語
云虚無僧ハ二ツ 臨門院 虚淡 云し

○宋高僧傳廿巻右丁唐真定府普
化傳ハ釋普化不知何許人也秉性
殊常且多真率作為簡放言語
不拘躬事盤山積禪師密密指
教深入堂奥誡令保任而發狂悖
寄與臨濟玄公相見乃對之以之
驢鳴旁侍無不哂笑直時歌舞
或即悲號人或接之千變萬態

略無恒度一日擎挾棺木巡街徇
戸告辭云普化明日死去時視之知
不可訾趙人相率隨送出城東門
而揚言曰今日葬不合青烏經二日
出南門人亦隨送又曰明日方吉如
是西門北門出而還返人煩意怠
一旦坐于郊野如入禪定焉禪宗
有著述者以其發言先覺普化

為敬聖科目中言非正員也矣
景德傳燈錄十卷廿七丁左前幽州盤山
宝積禪師法嗣ノ鎮州普化和尚
者不知何許人也所事盤山宝山
受真訣而佯狂出言無度暨盤
山順世乃於北地行化或城市或
塚間振一鐸云明頭來也打暗
頭來也打一日臨濟念僧捉住

云不明不暗時如何答云来日大
悲院裏有斧凡見人至高下皆
振鐸一聲時號普化和尚或將
鐸就人耳邊振之或拊其背
有迴顧者即展手云乞我一錢
非時遇食弁喫蕃暮入臨済院
喫生菜餞臨済這漢大似一頭驢師
便作驢鳴臨済乃休僧問法眼
臨済當時下得

什麼語法眼云
臨済留與後人師見馬歩使出喝道師
亦喝道及作桐撲勢馬歩使令人
折土棒師曰似即似是即不是師
嘗於闤闠間搖鐸唱曰覺箇
去處不可得時道者遇之把住問
曰汝擬去什麼處師曰汝從什麼
處來道者無語師掣手便去
臨済一日與河陽木塔長老同在

僧堂内坐因説普化毎日在街市中
掣風掣顛知他是凡是聖言猶未了
師入来済便問汝是凡是聖
師云汝且道我是凡是聖済便
喝師以手指云河陽新婦子木
塔老婆禪臨済小厮兒却具一
隻眼済云信賊師曰賊々便出
去師唐咸通初将示滅乃入市

謂人曰乞一箇直裰人或與披襖或
與布裘皆不受振鐸而去時臨
済令人送與一棺師笑曰臨済
厮兒饒舌便受之乃告辞曰普
化明日去東門遷化郡人相率
送出城師属聲曰今日葬不
合青鳥乃曰第二日南門遷化
人亦随之又曰明日出西門方去人

出漸稀出已還返人意稍怠等
四日自聲棺出北門外振鐸入棺
而逝郡人奔走出城揭棺視之
已不見唯聞鐸聲漸遠莫測
其由

○釈氏稽古略三卷 四十九丁左 唐懿宗咸
通元年雪峯鎮州普化和尚不知何許人
也事盤山密受真訣唯振一鐸佯

狂街市或居塚間至是咸通元年
振鐸凌空隱々而逝莫測其由
師嗣盤山積禪師積嗣馬祖傳燈
錄云々

○[illegible] 卅九丁左 盤山積禪師法嗣鎮
州普化和尚者不知何許人也師事盤
山密受真大訣而佯狂出言無度盤山
順世乃於此地行化或城市或塚間振

一鐸曰明頭来明頭打暗頭来暗頭打四方面来
旋風打虚空来連架打一日臨濟令僧捉住
曰總不恁麼来時如何師拓開曰来日大悲院
裏有齋僧回舉似濟々曰我從来疑着這
漢凡見人無高下皆振鐸一聲時號普
化和尚或將鐸就人耳邊振之或附其背
有回顧者即展手曰乞我一錢非時遇食
亦喫普暮入臨濟院喫生菜濟曰這

漢大似一頭驢師便作驢鳴濟謂直歳曰
細抹草料著師曰少室人識金陵又再来臨
濟一隻眼到處為人開師見馬步使出喝
道師亦喝道作相撲勢馬步使令人打五
棒師曰似即似是即不是師嘗於闤闠間搖
鐸唱曰覓箇去處不可得時道吾遇之把住
問曰汝擬去甚麼處師曰汝從甚麼處来吾
無語掣手便去臨濟一日與河陽木塔長

老同在僧堂内坐正説師毎日在街市制風
掣顛知他是凡是聖師忽入来濟便問
汝是凡是聖師曰汝且道我是凡是聖
濟便喝師以手指曰河陽新婦子木塔老
婆禅臨濟小厮兒却具一隻眼濟曰這
賊師曰賊賊使出去唐咸通初將示滅
乃入市謂人曰乞我一箇直裰人或與披襖
或與布裘皆不受振鐸而去臨濟人亦
送與一棺師笑曰臨濟厮兒饒舌使受之乃
辭衆曰普化明日去東門死也郡人相率送
出城師厲聲曰今日葬不合青烏乃曰
明日南門遷化人亦随之又曰明日出西門
方去人出漸稀出已還返人意稍怠第
四日自擎棺出北門外振鐸入棺而逝
郡人奔走出城揭棺視之已不見唯
聞空中鐸聲漸遠莫測其由

○明高僧傳七卷 二丁 南宋 左 [illegible]

青龍菴妙普傳 釋妙普号性
空漢州人未知姓氏久依黄龍死
心密受心印品格高古氣宇宏
邁因慕船子遺風抵秀水結
菴于青龍之野別無長物唯吹
鉄笛以自娛好吟

闍維舍利大如菽有二鶴徘徊空
際火盡始去塔于青龍菴

○同書八卷 十一丁右 南宋鄭州普照寺
道悟傳 釋道悟號佛光陝
西蘭州冠氏子也師生即齒
髮俱
臘三十有九弟子學全身建塔
焉系曰迦葉聞那羅延三差樂
則三起舞非習氣丑誰耶昔
郭邠陽能為國討賊拯民於

塗炭今為伊光居等方三日便橋
羣盜得非習氣使然者乎觀
其著白衣騎黄犢而吹笛遊
洛稱於毘盧頂上有行處此又不
可思議也矣

按右ノ引出ニ宋高僧傳
景德傳灯錄釋氏稽
古略土灯會元明高僧傳
などを考て虚無僧の祖とし

づきは南宋鄭州普照等の
道悟なり普化は高ばかりし
似つのはしまるなきは急べ
し畢亭の妙音し鉄笛は
吹くまでと道悟ノ及ばず道悟
が經笛は尺八ノ似たり白衣
は紙衣ノ似たり黄犢ノ乗
さるい馬聖とふ似たりかゞ
すあるは道悟の禪師なるん

朗菴和尚眼を着て工
夫し[illegible]んを後よ且本意を
たどりもてゆびして普化を祖述
せるは寧ろ傳會なれども
なかりぬべし

○本則

鈴鐸語

朱印

普化禪師也常に
振て鐸を曰く明頭来明頭
打暗頭来暗頭打四
方八面来旋風打虚

空来連架打一日臨
濟会僧把住曰或遇
不明不暗来時如何
師挖開曰来日大悲
院裏有齋僧回擧似
濟々曰我往来疑著

這漢
凌霄峯頂看雲人
普化堂中第一祖
武易多摩郡音梅
廓嶺山虚空院
鈴法寺
現住 閑山戢我

某年
某月某日

某子

一本則の文は得灯録宋高僧傳
五灯會元などの普化和尚の傳に
据て作り出すものし[illegible]
[illegible]

○虚無僧師掟書

一日本虚無僧に候ゑ勇士浪人一時に
為隠家守護に入宗門候ゑ天下に家臣
諸士に席に定条ゑ得其意事
一本寺宗法也並其派所得ゑ一
中に若相背者於有之ゑ本寺ゑ虚無
僧ゑ寺分急度宗法一行事
○[illegible]

二虚無僧渡世之後ハ諸君一廻り御尋
とて其所元免之給行之内諸君之法
杯与中虚無僧疎末意和之体又ハ
出陣之障り無之後ハ出来ハ先ハ子
細お改ハ有之下遊ハ有之ハ於て不お
渡候也江戸奉行所之吾来ハ事
一虚無僧挖陣之節ハ刀脇ハ兵衛具

之数一切為持中ハ為愛熱体威勝之為
為愛形致為愛ハ吾人以下ハ双物ハ懐劔
とし為元免下中事
一虚無僧之後ハ兼ニ家ニ之ハ敵様ハ
尋廻り廻国仕候有之ハ諸所並居或ハ
渡船等ニ至る往来自由元免ハ事
一虚無僧ハ諸君ニ書僧宗法ハ
君ハ賄賂ハ見遁ハ仕ハ有ハ

一 接舞は其の根を云て根を致す

一 虚無僧と外尺八吹中者ハ吹中者

於有之志持留中ハ尺ハ吹中者

者ハ尺八免をもし為吹中ハ

勾論諸士と外下賤之者一切尺八

為吹中ハ尺ハ尺ハ虚無僧ハ致す

一 虚無僧挖跡と其也下賤之志之痛

不厭挖跡不可致勾論并舌をもし酒

宴遊興賂饗應之所ハ望停止也

然ハ正月一日之惣無之志也本則云也

下中ハ

一 虚無僧乗ニ敵ニ出て遂吟時双方中

分ニ根還佶中ハ於ハ門勝負ハ

為致ハ勾論衆士之外一切ハ云ん然ハ

是ハ其ハ片房成致望停止す

一 虚無僧挖跡と其也或ハ居中宿往来

所々何方ニおいて天蓋を云諸人ニ就
合中ニ為ニ致す
一諸士人を切無刀を提ゲ与内へ欠込ニ
留ヲ並子細ニ及ぬ不依何事武士ニ居ニ
宗法ニ云ハ有ニ武士ハ和人一切
隠ニ中ニ為ニ致す若隠ニ其罪ニ
難成ハ此ニ事ニ縄を為ニ其罪を
其時一言所中ニ為ニ致す

○抜難をもつて一本のまゝ
切ヤウ誤あるべし

一虚無僧敵討段段者於有之者其
所委細相改者先先ニ帝ニ与勢集ニ
中ニ為ニ其同行ニ人相ニ先先ニ帝ニ
其諸士ニ外一切先先ニ帝ニ
一虚無僧修行往ニ命馬駕籠
一切法用ニ不ニ実ニ而ニ云ハ法

宇拾[illegible]
改[illegible]通[illegible]
通は虚無僧於有之[illegible]遂嘆
哉[illegible]
一[illegible]離他[illegible]城下町出拝修
行[illegible]若又
[illegible]
虚鈴[illegible]

豊吹仕[illegible]
一拵拝修行之[illegible]
長短成尺八色之[illegible]
一虚無僧之後[illegible]天下之[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

為其日學問之往来自由見免之事
候之如件
右
所意之儀相渡之局拜見會合之
命 能々為申 此下者也
慶七十九年 宣七月
[illegible] 判
[illegible] 判

本多佐渡守 判
虚無僧[illegible]

○虚無僧所持書異本

一 虚無僧之儀ハ勇士渡人一時之為隠家
不入守護之家門 依為天下之家 法士
之席ニ可定之事 可持之意事 虚無
僧者立之儀ハ法士之外一向坊主為姓
町人下賤之者不可取立事

[illegible]

㊂ 一 盡言 偏依 ㊂ 行 廊 ㊂ 疑 者 之 扨
何 ㊂ 事 ㊂ 石 摘 ㊂ 手 ㊂ 百 生 ㊂ 不 ㊂ 之 ㊂
役 人 ㊂ 度 ㊂ 地 ㊂ 所 ㊂ 代 ㊂ 有 ㊂ 手 ㊂ 村 役 人 ㊂
度 ㊂ 中 ㊂ 手 ㊂

㊃ 一 盡言 偏 ㊂ 海 ㊂ 言 ㊂ 男 ㊂ 子 ㊂ 為 ㊂ 第 ㊂ 帯 ㊂ 白 ㊂
敲 扨 ㊂ 事 ㊂ 為 ㊂ 扨 ㊂ 信 ㊂ 誤 ㊂ 言 ㊂ 者 ㊂ 對
盡言 偏 扇 ㊂ 扨 ㊂ 事 ㊂ 為 ㊂ 画 ㊂ 処 ㊂ 扨 ㊂ 於 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂
二 ㊂ 而 ㊂ 已 ㊂ 事 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 手 ㊂ 為 ㊂ 扨 ㊂ 改

㊄ 一 盡言 偏 ㊂ 言 ㊂ 誤 ㊂ 言 ㊂ 者 ㊂ 方 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂
誤 ㊂ 信 ㊂ 言 ㊂ 者 ㊂ 方 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂

㊅ 一 盡言 偏 ㊂ 言 ㊂ 誤 ㊂ 言 ㊂ 者 ㊂ 方 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂
役 不 ㊂ 手 ㊂ 扨 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 裁 ㊂ 判 ㊂ 所 ㊂ 或 ㊂ 郡 ㊂ 役 ㊂ 所 ㊂
盡言 偏 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂

㊆ 一 盡言 偏 ㊂ 言 ㊂ 誤 ㊂ 言 ㊂ 者 ㊂ 方 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂
者 ㊂ 力 ㊂ 分 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 実 ㊂ 扨 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 抽 ㊂ 丹 ㊂ 誤 ㊂

㊇ 一 盡言 偏 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 者 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂
味 ㊂ 事 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂ 於 ㊂ 為 ㊂ 之 ㊂ 所 ㊂ 為 ㊂ 事 ㊂

○按慶七十九年正月以後書
一通なるを前年と後者とのて
異同あるべき不謂なし其
今虚無僧なる請て以後時
彼等まて秘事を世に罷なしと
文言を酬酌し写得へきなれば
真面目にあざるべし

○延宝五年 伊勢

是

一本等住職に後に其子本等之子仲為
以筑評撰器量に本定之縦雖為法
諸国師弟子以其封存住其物 其実
状云言之本等 未有住職也 其事之
弟子者其読之と同本等一居之事
本等之住職を未有其
本等之弟子仲為以筑評撰其

小田城守印

虚無僧説流

本守中

末守中

○宝暦八年　御出身

信濃守殿御添

總最小金一月守武州青梅鈴法守ツ才

共相同ニ深編笠其ニ商買仕ニ者

訳事為守又志其宮家号右末流之

寺院分ニ官院請ニ合印持来不致ニ

虚無僧ニ商人たり氏望ニ帝振

ニ致ニ御料ニ御代ニ和鈴ニ鈴ニ

地内分ニ帝添ニ

宝暦八寅年十月廿七日

○享和二年　出上

一善化禅宗ニ終ニ慶七年中御出身以下

至其好延宝五丁巳年十二月十八日於笠原
山城守様板倉石見守様右両様御守様
於御列席ニ 御渡ハ不幸之士ハ門弟ニ死
ニ 修行後海俗為致ハ由ニ生中ニ住古ノ
由緒ニ之士之節ハ一ツ有之ハ海俗為致士之
家名血脉断絶無之様永天下之武門ニ脇ニ
ニ 生子孫ニ至 御用ニ立者有之ハ門ニ
実ニ御幸ニ出ニ 居ニ来ハ当家法正数仕様

ニ 御渡 御列席ニ家法之御書付頂戴
仕ハ依之該士以上之者入家形来ハ門ニ生
趣意取乱趣意書為差出武士ハ非渡無
之 道理全無拠始末ハ誰人ニ在之 證文
為差出毎刀并所持之不相納ハ門ニ当紙目
録取之取立門弟之数約仕於祖師前家
具相渡掟書為續史請判為致尺八傳
授仕番僧差添在方之寺院ニ差越短髪之

内寺迫邊而已挽許修行為致ハ縁ニ出座ハ
且其前ニ寄短髮之内ニ当ル者ハ居並迫邊
挽許修行為致ハ縁ニ出座ハ左右ハ 御渡
並ハ通 陰陽寺一之宮つ出座ハ 月縁令留主居
看主ニ再来ハ者ニ陰陽為仕ハ縁ニ出座ハ

一 門寺ニ仕並事別ハ之当僧ニ仕其中行ニ出ハ者
得僧仕ハ右之者共之内未ニ又未之無差別
無任寺有之義ニ留主居ニ中付ハ或看主并任

職ニ中付ハ縁ニ出座ハ

一 一月寺詮法寺任職之縁ニ其寺門寺并未ニ
一統致元評未ニ之内より任職ニ仕ハ縁ニ出座ハ
若違ニ辞退仕ハ者ニ同未之内より我古之無差
ニ一月ニ詮法ニ任職ニ再来ハ一月ニ詮法
ニ無任之義ニ寺内より院代或出行ニ再来
相勤ハ院代出行より並ニ任職ニ再来ハ縁ニ出座ハ

一 一月ニ詮法ニ入院後月之義ニ出内寄合

御列席ニ再ヒ徳目出礼事中上ル

一 一月寺詮法寺年始御礼光　堵之儀ニ又ケ年
目ニ一度惣出礼ニ事中上ル

一 一月寺詮法寺住職之儀ニ紫衣緋衣相除ニ
外色衣形付忌用仕ル袈裟ニ金縷又縁ニ
二十又條之忌用仕ル

一 一月寺末院法山寺西向寺　一詮法寺末院
安楽寺神宮寺　右四ケ寺之儀ニ形付之衣

色袈裟忌用仕ル左四ケ寺之外一ケ寺詮法寺
直末之儀ニ袈裟衣ニ紺黒忌用仕ル門ニ
寄形付或色衣忌色ニ儀ニ出座ル又末之儀ニ紺
黒ニ限リ儀ニ出座ル

一 一月寺詮法寺院代之儀ニ形付黒衣色袈
裟忌用仕ル退役仕ル者右法衣忌用仕ル仕来ニ
出座ル

一 惣而當家門之内身ニ挽鉢絡行之事ニ先

年ニ　御波ハ通袈裟ヲ緋黒衣袈裟ヲ結紬
木綿帯ヲ右ニ准シ尺八袋ヲ縫損ホ無之同
立而中ニ忍ニ若用仕ハ

一　御府内ヲ下駄ニ終ル仕ハ縁ニ出ル事ニ寄
得僧之縁ヲ裏付ケニ終ル仕ハ縁ニ古来ハ仕来ハ

一　在ニ之寺院ヲ在通之縁ニ草鞋ニ終ル仕ハ
ハ其地下或驛場等迎通杯之縁ヲ事ニ寄
下駄裏付ケニ終ル仕ハ縁ヲ古来ヨリ仕来ハ

一　配下之縁ヲ組合寺元評之上一月寺詮法ヲ中
出ル右寺ニ任職或ヲ看主中付ハ左一月寺
詮法寺配下之縁ヲ門弟元評ヲ以後任
相極ヲ上ニ一月寺詮法ヲ屋中出ル縁ニ出ル事

一　配下ヨリ一月寺詮法ヲ任職ニ無ル事ハ縁ニ古来
ヨリ無ル事ハ左一月寺詮法寺末ヲ之間ハ右
寺配下之寺院ヨリ移轉ホ仕ハ縁ニ文無ル事

一　配下衣袈裟ヲ緋黒限リ縁ニ出ル事

一 一月寺鈴法寺經職之表 異 門弟共ニ至近
御寺所下惣田席ニ居ル有髮之表共天蓋
御門地ニ渡除ニ云之下座莚ニ居ル事
一 利髮有髮之僧共閑食妻帯不仕
一 當家門之緣ニ一月寺鈴法寺二ツ寺之外惣
山ニ中表ニ而座ニ居ル也一月寺鈴法寺之緣ニ
先官之表ニ席仕

享和二壬戌年二月

一月寺院代 折紙寺
鈴法寺出行
安樂寺着之
嘯虎

寺社
御奉行所

○先師拾七箇條掟
一 公儀御法度 家端 可為下寺
一 背國法 名來之者 雅意 異理 仁 無異緣 可遠之事

一 家法式不可相乱若不行後之事許之
之者 急 後不及法事
一 不知一家法式僧侶児孫不可立之
附 新法不可執行奇怪之法事
一 本末之規式不相乱不勤若互理不尽許之
者不及法事
一 家門如古法風晨月夕看經看教無懈怠勤支
一 寺建立之時十方之檀越寄進雖自力建
立不為千年相應事
一 有由緒雖有弟子之聖不可為虚無僧若
無機緣於有之者能之宜起也決定云絶
人不致師弟子之誓誤事
一 往来行御之弟子等於先之一者飲酒
樗蒲不為停止 附 漫不可致執行多語事
一 弟子亦大小刀不可持若又他之虚無僧於
是持者押置急度可所師道事

一 結徒黨企闘論虚無僧ニ似合事業不可
致若及濫吹者急度一ヶ付度

一 縱雖為弟子數年在遠玉為却曲志能々
留之急趣於他方無異事ニ而指置度

一 他流之虚無僧致勤仕度由中志ニ而有之
ニ與遂糺明ニ抱事

一 五法相宗弟子於ニ而ニ決證捜疏窺本
寺ニ令擯罰事

一 江戸吹入之虚無僧於ニ而ニ性ニ宜ニ除遣
虚無僧之名ニ急度所師ニ為追却事

一 寺地入貨物不可奏名利所四壁伐竹木猥ニ
不成荒寺中事

一 雖出迎遣剃髮之僧ニ惡袈裟衣有髮之
輩袈裟或御布一ヶ持尺八ヶ支名事
右條々餘ニ准之所子起寅ニ而ニ護夫弟
行ニ由心一切在我一切之事業從名利

名少起止可勤之義此合古相背業を[illegible]
度可中付志也仍而如件

午時延寶五丁巳年　林鐘吉祥日　六月仁

談流本寺　一月寺

○負京[illegible]控[illegible]

一公儀法度[illegible]宗門[illegible]禁戒勾犯矣
所謂君子有三畏畏天命畏大人畏

聖人之言云

一[illegible]之[illegible]發[illegible]志則[illegible]
少其意[illegible]故如何[illegible]公儀[illegible]
度[illegible]有對[illegible]人犯逆人最偷盜人
[illegible]等之輩[illegible]禁[illegible]可[illegible]諸[illegible]
[illegible]可穿鑿[illegible]海[illegible]孝子禁止也若犯
戒[illegible]

[illegible]

一宗門衆僧封師而浮冒緣宿最宗
門之寺持縱雖為他流之僧持毛頭
處外為衆行海宿之輩緣事

一衆僧之交不可互非礼遍歷之先而法眷等
忘趣誘之之事如方致海寺師者可決之

非先而猥道具方行或罵四言發怒緣事
發風情他之嘲之嗜事

一剃髮之僧而為中有髮之僧之事掛髮
流僧喰魚肉博賣等生外不善錯礼
於之之事隨之科之令擯罰事浮刀船
指之不為中帯大小刀木事堅禁止事

一師無所他未之僧并省師命致擯罰之輩
先之者所宗門改易之事

一 於市中拖袖之長若無下之長者之雖漫作
法禮把而不論之前謂卿血人先汚其口矣
辱之筆是所難忍也忍一時之錄無百日之
憂也

一 親力過寡婦之家有用別刻事終其速
去若無怪懸虛名之咎也所謂遠之忍刻
必有迫惠也

一 未寺等之法弟子中無咎者理不可

一 本仕直致万數以前之惡弟子中法弟子
等致徒黨對師無咎事即共双方徒之
吠之便不分是非以同心大哲之言無咎者
於致擯罰者別有之決是非求之無
所本寺而於致仕直之其任職之得之剥
反袈裟衣令擯罰矣門弟子徒黨之
者公儀中之曲事不中付事
於江戸裏僧法事之儀相所有之事

於本後を以萬事可致収束事

一 年々末寺會合定日末寺不残罷出
可致右之旨堅可致穿鑿事
右之條々堅固ニ寺中若相犯輩在之者
於本寺之上罷出可處重科者也

貞享四丁卯年
六月 日
普化禪宗惣本寺
一月寺

〇二年 代住師 捨之

一 普化禪宗之儀延宝年中ニ條々
以後御改之上御公儀様ニ而御證文
を被下候ニ付而諸国末寺共其掟を
相守可申候得共近年ハ猥ニ相成候
ニ付其通ニ不致候而子細在之候事
ニ付今度定候條之通急度可相守
事ニ候縦令何方ニ而も本則之事
を除ク衣服其外無沙汰ニ於

[illegible]

相談之上役僧を以可申也、為其之
得人ゝに至合状、即ち如ニ可相之事、
附 正史之無礼ニ智、聊も而法之意ニ
至之可愛ハ也、此体先体長ニ
家縁之外、俗家ゝ猥ニ不可之事ハ
惣而非礼之儀、可愛事、
一 也体場所之儀ハ古法之通、諸合中談、若
晩ニ可相定ハ、場所若無、縄掛之事ハ不可
施

雑言事
附 是場也体之意ハ延期面、若晩可
所至事、
一 也体之意也入ハ 祖師若拝礼可至之度、
一 御成之意ハ所之方角ハ不及申、惣而人ニ言之
場所可致之意事、
一 也体之儀、朝夕ハ時より夕七ツ時ニ可相事、
一 法眷相互ニ睦愛ハ不絶何事、可申談ハ勿

心ニ恨ヲ心身家門ニ祝矩可ニ中候ハ作
去再三及異見ハ不用時ニ無音役僧ハ
下ニ中也ハ私ニ趣意ヲ以相對ニ法四討
不可致事
附 新来ニ紫ハ菊燭先紫ニ老畜
ヲ下相守ハ作絣先輩より不法
ニ存ハ方ヲ立ニハ無趣意
得僧ト可申也事

一 祖師忌并妻度ニ會合不来ニ紫吟
味ニ且可致退御事

一 毎月參日 祖師忌并師範ト式礼ヲ立ニ度

一 寺并書所内外ニ成不可致他言ハ且
人ニ苦悪ニ陰噂等不可申 惡ヲ相礼畢
胸脇ニ御ヲ立ニ可致事
附 病体ニ寄十日限リ得僧ト可申事

一 以用并家用ニ外不可致粮行ハ家縁ヲ

拾分供家に此入ゟ可致事

一 供家に無合ゟ之義を得僧に頼也て其事

指置に銀尋来ゟ得僧に中也て但是図

附 供縁に私に至合後日に相願ゟ可

力越致事

一 尺八稽古之後狀四時ニ不限猥ニ可致事

附 付外 楽く無用之事

一 御用談を可為中客来用談之事ゟ尺八

吹中ゟ可致事

一 迎火之節を御用書物并本等寶物

旧記に焼失無之抵急ゟ諸合中談ゟ可

致無に第一自分之不抵ゟ右之不之及焼

失ゟ可て力越度第又右之不に至ゟ在自分

之不致焼失ゟ可之中也ゟ拾分之事

一 登山下山之事古例之通ゟ具可致事

附 家具并當用之外見苦敷不之所

持ちこと有変事

一 登山之茂拝香可相納事

附 以用家用之茂を不及拝香事

一 末山并法眷を勿論家縁たりとも厳しく

前ちこと茂を得僧に下也事

一 不依何事他之物を不可致借用事

一 末山登山之茂非礼之言行ちこと有変事

一 末山并法眷私用ち茂山也書之御持ちこの

ひ相立事事

一 也許先禁酒之事

右之條々蒙重相当家法古来之通ニ

相勤得僧并法眷共ニ持ち来ル

相互ニ不遂以味ハ縦師範たりとも不

宜成ち無之也ニ恐て乃是見ハ此旨相尚

業務ちこと法罰下付者也

月日

執事

○列祖心傳

夫秋八者唐玄宗皇帝嘯次之後十
歲有緣山結而言十字街頭吹之秋
八山城国宇治边降也亦曰凡八者不空
中道應解脫之音樂也上圓形法界
身滿心中凡緣也上切口去金剛一之正体
一也歌口之心月也言語也下切口之胎藏也
三節授時之三界唯一心也升起雜縱順

孫面四穴之表四方後之一穴之色則是空
也合空風火水地也故五音五調子五智如來
說也佛前ニ為吹時之平等慈悲朗ニ念報安
書洋州ト吹也路次ニ為吹時之六道含識草
木國土森羅万象悉皆成佛ト吹也家門而
吹時之一切衆生七邪念可至道而知識而
吹時之上來菩薩ト吹也故ニ能聞之人滅絶
三業罪無明煩惱之雲而自他平等利益也

丈釈八十三國傳來天竺十無邊菩薩七邑
之釈八ト吹初也大庵之普化禪師五節之
尺八吹初也
從世尊二十八祖　達磨圓覺大師　二祖
三祖　四祖五祖　六祖惠能大師　青原行思禪師
南岳懷讓禪師　黄檗希遷禪師
源淵義玄禪師　盤山積禪師　普化禪師
宝仗大居士　僧如大居士　国化大居士

馬祖道一禪師
百丈智海禪師

理正大居士　蘄詮座主　括總大居士
達空居士　妍兒居士　艸喆居士　悶通居士
岘秀居士　不変居士　大虚居士　無難居士
贊格居士　觀察居士　後頃居士　仗雲居士
才二十八祖從達磨大師普化禪師四十代之祖
從世尊四十一代普化天上之事　寛永元年之千
八百年四居士傳法之歳季寛永元年之七
百歳来朝延長寛永元年至三百九拾年也

善化ニ鎮州人也於法諸盤山積下不生不滅
之祖師也善化天上ニ時芸唐玄宗皇帝
大中元年十月三日天上退去之時雲中鈴之
音鄉音有之日本後柏原院當御宇中古大
破四居士進古實法相續也風遊二威法燒玉師
門和來朝紀伊國由良入津我朝廣流古實
猶紀州鷲峰山禪丐
○天蓋 佑云笠 編 鉄扉 佑云鉾巻

掛羅 佑云袈裟 乾坤六府 佑云武袋
袱子 佑云風呂敷 戦子 佑云足袋
草鞋 佑云履 口傳 空洞 尺八 律管 尺八
○禁制 密會 盜賊 丘罵 喧嘩
口論 以上
○尺八開様之傳
クワン尻ヨリ見手ニテ三ノ穴ヲ極ム其ヲ
以ウラ穴ヲ歌口ヨリ ヲトリ極ムヘシ然シテ

右ノ寸ヲ二ツニ折外ノ穴順ニ定ムヘシ
四季調子　春双調　夏黄鐘
秋平調　冬盤渉　土用一越
彫調子　正平調　二勝絶調　三下無調
四双調　丑鳥鐘調　六黄鐘調
七鶯鐘調　八盤渉調　九神仙調
十上無調　十一越調　十二断金調
十二時ニ同　寅ノ一天ヲ平調トス

調子ニ土性　雙調木　黄鐘火
一越土　平調金　盤渉水
常ニ心掛ヘキ事　目ヲフサキテ吹笛スルヲ
目ヲ出シテ吹笛スルヲ
季和ニ吹笛スヘキヲ
歌ニ　稽古シハ晴レニスルソト思ハサレ
瞻シハ常ノ心ナルベシ
呂律ハ　呂ハフトシ　律ハホソシ

序破急　是ハ長ク舒ル跡ヲ軽ク捨テ
吹キ其跡ハ人ベテ吹ベシ
メルハル　是メル時ハ心ヲ張リ　ハル時ハ心ヲ
メルトノ事也
拍子ノ起リ　乗サエ　手サエ　ニビサエ
大切ノ事ニ歌ニ
何事モ工夫ニ一サルヿアラジ習ノ上
ノ工夫ナリケリ

師匠ニモ　ハズハイカニ教ベキ心ヲ
クダキ　子シコロニ問ヘ
スル業ヲ　トツラ　恥トヤ思ラン問
ハズハツヒニハチトコソキチ
上手コソ物ギラヒスルヿナケレヤウ
ガニシキハ下手ノ名ナリ
下手ノ人ハ上手ノカザリナレ何
トハロクトソシリバシスナ

○宝暦七年三月
虚無僧修行先々挨拶に得出

一家中相迫に茂前々より見合場所差留に
然に処人により不致兼行事も有之に右之手印
如何言扱て然哉之事

此家中相迫に後者存に此後相對之後者諸国
致巡行事に可定而此家中にも相迫に後者
存に武家に可相町在其修行に相迫に者に生
家より志無キ不を押ニ致不望に後者相来

よりも修行所当之事並に後所在に成而
古来之通ニ可致之事ニ付後所当者相来可致
後事存に自然合力之後者生家之之名次
者之事所望に押ニ乞に後者相当に法度に
所望に可致之事に後者に生人より不相
用に茂者生一流之ちに所望之事により
外者之無所望に後者存に

一若当家之内に家修に入迫に事不相来事に

武入込ニ而若如何様之手計ニ而御成敗之事

右之儀、家来之内より入込申候者ハ無御座候、何れ
地侭陣近辺越候ハハ隣国一統之法式
ニ御座候、捨扶入と遣ハ申志もこれなく、然も候ハハ余用
ても相叶候義ニ候ハハ先大法之通りニ御座候右之所ニ在之候
是而段々承り候所ニ而若もの取扱無之事

一 喧嘩口論仕候若如何取斗ニ而御成敗之事

右之儀喧嘩口論有之候ハハ、武家之僕も役人并
若手ニ而儀ニて御成敗ニ及候所在之儀ハ不許
役人若弁ニて御成敗ニ取申者ハ科不在紀内非人
抔ニも取扱申義ハ承り申候ニ付虚無御座候
之儀も武家之隠密ニ有之ニ而家門ニ而目黒
中ニ在之二十年以前ニ御座候所人百姓も虚
無御座候、若儀者御座候様ニ仕候
之者ハ果ニ而御座候早速非人寄ニ手ニ
もいろいろニ而御座候

一若不行諸或を盗杯致に節を何方にも不相
達家法之仕置中付以て然成之事
此後以家法に依付に而も其所事以ても以前為
右之所仕置之通信者を一家一流之者及兼
之所領之横せ無之様觸頭より門戸相ち右之
致詳也曽不可近事及 公道中事に以前
此義諸事多以前儀倍以長留置之通達之
一家に以門戸之事以事一事存

一病死致に節何方に其達致行付て然成之事
此後薦僧之後を門戸相ち并 諸国一家者
寺ち寺より其則往来後置界右者則
往来不相不致に其虚無僧ならしに其所に
其則ならしに分を致病死に其如之後人
不届させ以ても置宮仕過を 御付以後賜度に
過ち其則元に内所知を事に其答下に其
一其寺を一度ちら許法ちに限り中国篇ある遠
変ならしに節も 宮 而寄之其ち其達に成右之

外面者ニ云ハ我世語ハ年ニ知ルハ義文事
世俗年ニ中ハ日本二ヶ年ニ知ルハ
青梅 鈴法年 小金一月年
世界面ニ長崎迄右末年ニ此ハ武州鈴法ニ
ニ中ハ歳一月ニ来ル所ハ遠藤ニ事
ニ江州迄此通ニ近年ニ近年ニ
此通達ニ事ハ何ニ此ハ接ニ事ニ且諸国ニ
ニ云ハ年ニ如何ニ事ニ知ル

一 公儀御用ニ由ニ以此權威緋細ハ数ニ云
篤拙ニ事ハ如何ニ云ハ事ニ
世俗 公儀御用筋虚無僧ニ御用ハ後ニ
此ニ事ハ 御先代ニ此ハ御密御用ニ
御用ハ後ニ云ニ由ニ一月ニ鈴法年
二ヶ年ニ内ニ無ニ御用ニ 御用ニ上ニ云ニ故業
内ハ云ニ人宛ニ所ハ義ニ此御用ニ

中追放ニ外ニ出候儀ニ付、無宿ニ不相成様御用ニ中候ニ
及候ニ付、右則仕来ニ候後ニ至り評定所ニ而和解
ニ而候者之儀ニ虚無僧ニ而届候ハヽ右則仕来
尼寺ニ而候者ハ何方ニ而も中追放ニ可申付
但シ右ニ而京都在寺之儀ハ修行之為ニ可候

一 虚無僧宗門之僧ニ付宗門ら遠流中ニ而も
出家御暇被下候ハヽ仕置申付候、又ハ
寺ニ可遣候

一 竹ニ而掛縊ニ致候者ハ天蓋をもき追放之事
一 右之中指を切追放之事
一 鼻をそき追放之事
一 額焼印ニ而当追放之事
一 右之耳をそき追放之事
此分宗法ニ而何方ニ而も其在所届有之候ハヽ
仕置申付事

○宗門心得方之事

一宗門之儀武門之隱家之
全無拠武門不仕
合之者暫く宗門ニ取ヲ暫控候修行を以て
日を送り時良を以再詣官致度者之儀ニ心
得を以始末の儀事或ハ宗門之儀一躰望ニ付
致入宗度者ハ者ニ付ハ是又ニ時宜ニ當
事諸士の外ニ於ニ百姓町人ニ於ニ急ニ給ハ
其ニ二月ニ於ニ為度之事ニ且又度之ニ付續之儀ニ
入宗之事ニ諸人を度實ニ疑ヲ及者ニ無ニ武

門全無拠始末者入宗者ハ且ハ門ニ貫ニ吹
笛修行を以ニ其日を送ニ也當人ニ望之事
陪官少屆ニ古例之事
但
入宗ニ取来武士道ニ於ニ無ニ理全
節中ニ過ニ諸人ニ無ニ者ニ之事ニ
諸人ニ無ニ曰合事ニ無拠始末ニ得ニ
無ニ不ニ寄寺ニ存ニ考弁を以當ニ百
世門外ニ持金ニ無ニ者ニ菩提ニ得ニ

支宗門書付之者致欠落候者、其寺等之
附置寺社江可申出、何之上ニ而御国ニ可及
及聊爾之事

一 国々之者相対ニ而隣国之町家旧来之据所
預り住来事、然処寺社之所役人ニ而預り置
金銀取扱出入等ニ而者留メ候者ニ而其国之者へ付届一言ニ至
之者之方役人、及其掛合扱方致預り置度
但
御国法ニ而致預り置ニ而可致

致之ニ悪事候ニ付先方ニ入候ハヽ、早〻乍善ニ而内外
等ニ候得者、糺之致候事ニ候、且ハ御国法
還之上ハ不及申、致穿鑿之事

一 御府内之者其方へ可相渡候ハヽ、先方之ヨリ掛合
預り置候者遣候故、人之家之方へ掛合候得而
を住居先糺之上可致候事

○ 五法相省候而、宗門改之事

一 一宗之者于今致候而、其者師ニ候得共法義を

大科之者ハ法何事ニ五科ハ具ニ本来ハ後
公儀ニ伺之上及始末ハ事
一盗賽舞ニ左右之大揚ニ切退御ニ在恒主ニ
寄右一方を切士官ニ立戻ニ右刀打ハ本来
抵古来より仕来ハ事
一博変或ハ嘘を以ハ不足不為之ニ面ニ火印ヲ
當退御是より以下法ヲ省ハ若一流之所具ヲ
停止等化下ニ以ヲ接ニ諸文ニ在之退御ニ在之

通法ヲ之者ハ之ニ科之恒主ニ寄
ハ未ニ詳ニ以古来ハ事
一御三家様御三ハ様交方御通行之事
御廃用在之ニ也ニ本来丈猶道在之也
無拠節ニ御先拂之揚図ヲ請ニ恒在者
事無ニ御先拂之所中ニ當家ハ以ニ業用ニ
切ニ片寄恒在ニ所打物ニ下座ニ致ニ在
下駄ニ以ニ切ニ異ニ之ニ以下坐御通行

右所ニ作ル事ハ挖弁縫り致ル事

一虚無僧ハ所持之天蓋ニ尺八ヲ京ノ之法
器ニ事

一天蓋之儀ハ武ノ不幸之士共之儀ニ作ル事也
主人皮名視聴ニ并自分之恥ヲ厭入家
挖弁縫りヲ以蒙命致ル續時芸ヲ持候
系致ル歟又ハ生人ニ寄ル主君致ル儀ハ
之ニ作ル事ハ法人ニ面ヲ不合抵可致事

一尺八ヲ法事ニ為之尺八ヲ以勢致呂ニ作ル
物ニ作ル事盤渉真虚霊或ハ鬱海篪鈴
暮右曲吹笛之事

一挖弁縫りヲ云ハ鬱海篪鈴暮空鈴
暮吹笛ニ致事併先方ヨリ望ニ作ル事二十
五曲之内吹笛ニ致事
但唱物ニ停止中ハ指扣ニ事

一法王挖弁縫りヲ云ハ其人ヲ有人之

分多勢門緒致有數以且經行為無
通り之義也幾人為門緒而苦事
讀書門家事儀有之協和之義登小
示讀之之修行可致事
右之通心得再生以後之
天保六乙未年五月　小金　一月寺

○普化宗興起
高祖普化大禪師
釋如年尼如来廿九世唐初代達磨
大師十世正派○鎮州ニ生ル唐大中九
乙亥年冬十月十三日遷化于時日
本人皇五十五代文徳天皇御宇齊
衡二乙亥年也
寶伏大居士　鎮州生

僧恕大居士　鎮州生
国作大居士　鹿国生
理正大居士　幽州生
四大居士来朝者人皇八十八代後深
草院御宇建長六甲寅年法燈
国師入宋帰朝之時　宋理宗宝祐二甲寅年也
同座船中秋八月二日止船紀州由良
湊而閑住興国寺廣化庵弘通普

法燈国師覚心ノ事
女朝高僧伝廿七ノ十

化正法四居士各四弟子授血脉於是
十六弟子之末派分十六派雖然九派
絶殿至今世七派連綿也
斯詮派　後改金先
下総
火下派　後改治総
武蔵
奇竹派
武蔵
不智派
北国
梅士派
山城

夏譚派　後改小菊ト　下野
司祖派　後改根笹ト　相模
以上七派現相續
養澤派　山城
芝隣派　同
義文派　九州
隱巳派　同
宗和派　北国

錐南派　石見
短尺派　陸奥
野木派　尾張
兒　同
以九派断絶

一月寺冷法寺ニ往昔慶長年間
東照神君依　台命被為定本寺觸頭於
是構于江戸定書所而究書僧六人爾来

糺明一家之紀矩賞四討之徒之正邪若有省
裁配者悉令擯罰之故唱両役寺末派之
徒仰之称為本山又録所云
日本総司諸派觸頭
下総葛師那風早庄小金
金先本寺　金龍山梅林院一月寺
御代官所境内除地 白元寺無之 七里
開山金先古山禅師　正嘉二戌年

下総国小金一月寺ヲ完闢ス永正
四卯年六十六代春及有夢和尚
靳詮ヲ金先ニ改
武州多摩郡三田領青梅新町
御用番所
江戸浩学東仲町
廓嶺山虚空院玲法寺
御代官所境内除地 白元寺無之 十里
開山活総可大居士
中興
完山湛空呂圓和尚
御用番所
江戸牛込明納戸町

天文元年武州川越葦草村鈴法寺ヲ立ル

慶長元年二十世月養風和尚寺号ヲ今ノ地ニ移ス

金先流一月寺末十ヶ寺

下総葛飾郡形橋
御代官所 陰地イ
神明山 清山寺

武州橋樹郡神奈川
御代官所 陰地イ
青木山 西向寺

武州[illegible]郡濱出
水野越前守様下
玲澤山 普大寺

筑[illegible]山門郡柳川
立花左近将監様下
大間山 江月寺

上総山辺郡土[illegible]南玉村
松平筑後守知り所
不動山 清岸寺

上総夷隅郡大田[illegible]
松平伯中守様下
長光山 折紙寺

門玉[illegible]郡三黒村
組与力給所
三畔山 松見寺

筑後生葉郡吉井[illegible]村
[illegible]
松音山 林接寺

上野利根郡沼田
土岐山様守様下
瀧坂山 圓法寺

門玉群[illegible]郡白井村
御代官所
白井山 浄水寺

西向寺末六ヶ寺

下総葛飾郡宝隆花
御代官所
宝珠山 観[illegible]寺

武州[illegible]郡下目黒
芝山佛殿料地
瀧渓山 東昌寺

渡州有渡郡府中安原村
門前町四軒ヶ方紀
相州三浦郡下文田
武州多摩郡本町田
門州門郡大谷村

福聚山　無量寺
浦[谷]山　龍山[三]寺
梅光[見]山　大澤寺
大谷山　南松[正]寺

折紙寺末

房州長狹郡貝統村
大[illegible]三[illegible]
武州多摩郡上布田
内代官所

福王山　永福寺
大光山　安樂寺

活総流珍法寺末十ヶ寺

相州大住郡伊勢原
飯河三郎知行所
武州葛飾郡綠[目木]新田村
稲植[illegible]五郎知行所
門州多摩郡二分方村
柳沢和田出雲守知行所
甲州巨摩郡乙黒村
内代官所
犯罪之来郡長崎
内[illegible]
上州新田郡太田
内代官所
門州群馬郡之[illegible]
松平右京亮[illegible]
武州榛沢郡深[illegible]
内代官地

[照]見山　神宮寺
亀宝山　東[陽]寺
光輝[柳沢]山　澤水寺
来機山　明暗寺
長福山　松寿軒
[illegible]寿山　理光寺
金剛山　慈上[常]寺
稲荷山　福正寺

上野群馬郡高崎
松平右京亮博士

大龍山 清海寺 明イ

安樂寺末三ヶ寺

武州足立郡与野上峯
此代官不

龍峯山 松源寺

同州比企郡小川大塚
金田恰三ヶ寺 知行不

大永山 高倉寺

伊豆田方郡鶴野大平
鶴田十ヶ寺 知行不

功徳山 瀧源寺 龍イ

両役寺配下

山城愛宕郡京大佛池田町
大佛境内地 平安地イ

寺行 小菊 不智 根益 梅士

虚霊山 明暗寺

同寺末

伊勢河曲郡白子山岸丘
寺島村野城白子イ

普濟寺

筑前那賀郡轉多 祠園町イ

一朝軒

下野常陸

十九ヶ寺組合

梅士

下野河内郡宇都宮
戸田因幡守組合

松岩寺

同

同

同

同

同

同

同

同

下野河内郡宇都宮
戸田因幡守組合

正安寺

同玉郡賀郡上田村
板倉三郎知行不

普門寺

同玉郡賀郡祖母井村
太田京兆澤守組合

玲澤寺

同玉郡賀郡千本郎中根村

梅川寺

同玉郡賀郡茂木砂田村 茂木イ 茂木イ
細川長門守組合

観雲寺 音イ

同玉郡賀郡榎本町
土井大炊頭組合

梅士

常陸国真壁郡古内村（小江イ）
弥度右近知行不

同

同国信田郡白戸府町
久世隠岐守領分

同

同国新治郡片埜村（町イ）
永井陽次郎知行不

同

下野河内郡上三川大町
吉田小太郎知行不

同

同国同郡薬師寺
以代官不

松岩寺末

奇竹

同国都賀郡廉沼
戸田因幡守領分

同

常州筑波郡筑波町
筑波山神領

安樂寺

大然寺（慈イ）（悲イ）

光安寺

長福寺

清心寺

住泉寺（重イ）

古通寺（右イ）

小菊

同国真壁郡下書西町（城廻村イ）
井上遠白守領分

同

下総結城郡本々結城
水野日向守領分

同

下野塩谷郡喜連川

同

同国河内郡多村（峰イ）（幸イ）
石谷十蔵知行不

同

同国那須郡大田原町
吉田原藤浮守領分

普慶寺末

同

同国同郡福拔町（満イ）（キヤカテイ）

陸奥出羽

十二ヶ寺組合

心月寺

長全院（寺イ）

常春寺（春イ）（雲イ）

清雲寺

普慶寺

清岸寺

不智　奥州葉田郡植田宿　上イ
安夏郡了寺領分
同　同州釋雲郡南部花巻
南部信濃寺領分
小菜　同州信夫郡福満　上町イ
板倉鍼中寺博下
不智　同州栗原郡金成
松平陸奥寺領分
同　同州白川郡塙　棚倉イ　本輪イ
四代宿下
根笹　同州苅田郡白石宿
仙臺医行倉小十郎在下
不智　同州名取郡信田宿　増イ
松平陸奥寺領分
小菜　同州伊達郡川俣宿　小綱木邑イ
四代宿下

高岸寺
松岩軒　正岸寺イ
蓮芳軒　寺イ
金成寺
武音寺　立イ
武縁寺
布袋軒
清涼軒　鈴寺イ

根笹　同州宮多郡松島中村
相了長門寺領分
不智　同州志田郡菜畑　先塩イ
松平陸奥寺領分
同　出羽村山郡山形　旅籠町イ
秋元但了寺博下
同　奥州西岩井郡山目宿
松平陸奥寺領分
金成寺末
根笹流　越後国蒲原郡中ノ原村
塚丹後寺領分
當時無院十八ヶ寺
金先流

喜條軒　正
三夕軒
仰竜軒
鈴澤寺
明暗寺

肥後熊本
同所
同福岡
土佐高知山
活総流
出羽秋田
駿州沼津
上州渕石

南心寺
南松軒
一宇斬
高山寺

風袋寺
高澤寺
光林寺

根笹流
越後高田
奥州浮沢
門州立屋
越後柏崎

露月庵
門流
覚心
一養

音竹流
筑前福岡
石見銀山

圓通寺
西岸寺

不智流

奠妙小山田　葉流

門妙山神　花林軒

門妙山上　順宅

門妙鶴師　門笠

越後糸奠川　一竜軒

寺格之次第

両役寺

一月寺　先官上座

鈴法寺

扣役寺末寺筆頭

清山寺　同断

安樂寺

扣役寺末寺二老

西向寺　同断

神宮寺

兩役寺　寺格席須先官上座

同　又末　右同

京　明暗寺

下野常陸　十九ヶ寺　寺格ニ云席先官上座　但當寺上座

陸奥出羽　十八ヶ寺　右同断　但年寺上席

京　明暗寺末

越後　明暗寺

水戸八箇寺

小生瀬村　永隣寺

上手綱村　勘車斎

下手綱村　勘夕

小中村　玄達

折橋村　徳山

小姜村　勇哲

大中村　鉄水

馬頭村　長泉寺

水戸領ハ箇寺ハ一月寺門弟ハ人ヲ
義公御代ニ御取立アリ今ハ永隣寺勘車
斎々相続シテ外六ケ寺ハ廃寺トナリヌ